

小泉八雲作

ちんちん小袴

朗読 秋元 薫

第二卷 2. 小泉八雲「ちんちん小袴」

小泉八雲（こいずみ やくも）旧名 ラフカディオ・ハーン

1850年（嘉永3） - 1904年（明治37）。



アイルランド人で軍医だった父とギリシャ人の母のもとに生まれた八雲は、フランス、イギリスで教育を受けた後、ジャーナリストとして活躍し、1890年、40歳で来日。英語教師として教鞭を執るようになり日本人小泉節子と結婚、帰化する。松江、熊本、神戸、東京と居を移しながら日本の英語教育の最先端で尽力し、欧米に日本文化を紹介する著書を数多く残した。日本では「雨月物語」「今昔物語」などに題材を採った「再話文学」で知られる。妻は日本語が読めない夫の要望に応じて、日本の民話・伝説を語り聞かせるため、普段からそれらの資料収集に努めていたという。「ちんちん小袴」もその一つで、内容は「昔、畳の面倒をみる妖精がいて、畳を汚したりだめにしたりする子供たちを、からかったりおどかしたりしていた。ある晩、怠け者の少女の枕元に、突如、一寸ほどの小人が何百となく現れ、歌い踊り始めた」。発表は1903年（明治36）。

和室の床は藁草いぐさで織られた美しく厚い柔らかな畳が敷き詰めてある。畳はぴったり詰まっているから、畳と畳の間にはするりとナイフの刃を入れることができるほどである。日本の人たちは毎年一回、きれいに畳替えをして、家の中では靴くつを履かない。イギリス人たちが用いるような椅子や家具も使わない。床の上に直じかに座すわり、眠り、食事をし、時には書くこともある。だから畳はいつもきれいにしておかなければならないのである。日本の子どもたちは、物もの心こころがつくころになるとすぐさま、畳をいためないよう、汚よごさないようにと教え込まれる。

ところで、日本の子どもはとても良い子である。日本についておもしろい本を書いた旅行者はことごとく、日本の子どもはイギリスの子どもよりずっと従順わんで悪わるさもしないと言いきっている。物をいためたり汚したりしないし、自分の玩具おもちゃでさえ壊こわさない。い

たいけな少女は自分の人形を壊したりはしないのである。いや、少女は人形を大事に扱い、成人し結婚したあとでも、それを保存しているのである。少女が母親になり娘をもつと、その人形を自分のかわいい娘にあげる。そうすると、その娘は母親と同じようにその人形を大事にして、成人するまでそれを保存し、ついにはそれをその子どもたちにあげることになる。すると、その子どもたちは、自分の祖母と同じようにして手ぎわよくその人形を抱いて遊ぶ。ところで、あなたたちのためにこの小話を書いている私は、百年以上も経つた人形で、新品の時同様まったく小綺麗こぎれいに見えるものを、日本で見たことがある。これももつてしても、日本の子どもたちがどんなに良い子であるかお分かりになるだろう。そして和室の床がほとんどいつも清潔に保たれる——いたずらによって引つかかれたり、損そこなわれたりしない——わけを理解していただけるだろう。

日本の子どもの全部が全部それほど良い子なのか、と私に尋ねる人もあるだろう。なる

ほど——いやいや、ごくまれに行儀の悪い子どもたちがいることはいる。これらの無しつ
けな子どもの家の畳ようせいはどうなることだろう。だが、心配は無用である——というのは、畳
の面倒をみる妖精ようせいがいるからである。これらの妖精たちは、畳を汚したりだめにしたり
する子どもたちをからかったり、おどかしたりする。すくなくとも以前は、この妖精たち、
そのようないたずらっ子どもをからかいおどかしたものである。私はそれらの妖精たちが
今でも日本に住んでいるかどうか、しかと確信があるわけではない——なぜなら、新しい
鉄道線路や電信柱が多くの妖精たちをおどかして追い払ったからである。だが、ここにそ
の妖精についての小話がある。

昔、とても綺麗な、だが、たいへん怠なまけ者の少女がいた。この子の両親は裕福で、多
くの下男、下女を召し抱えていた。召使たちはその子をとていつくしみながら、つかえ
ていた。その子が自分でやれるようなこともみなすべて、なり代わってやっていた。おそ

らく、このためにこの子はそんなに怠け者になったのであろう。美しい娘に成長しても、やはり怠け者であった。しかし、召使がいつも着物を着せたり脱がせたり、髪を結ってやったりしていたので、この娘はとても魅力的に見え、誰もこの女の欠点について考えさえもしなかったのであった。

ついに娘は勇敢な武士と結婚し、ほんのわずかしか召使がいない家にこの武士と一緒に住むことになった。そして召使の人数が少ないのを、この女は心もとなく思った。今まではいいつも誰かが何くれとなくやってくれたことを、今度は自分でやらねばなるまい。着物は自分で着て、自分でたたんで、大事にし、夫の気に入るようにさっぱりと小綺麗に身だしなみを整えておくことなどは、この女には、なんともやっかいなことであった。しかし、夫は武士であり、武者隊とともに家を離れていなければならぬことがよくあったので、

この女は時には思いつ切り怠けていることができた。夫の両親は年老いて、やさしい人た
ちだったので、娘を叱しかるようなことは決してしなかった。

さて、ある晩、夫が武者隊とともに出かけて留守であった時、女は部屋の中のかすかな
物音で目が覚さめた。それは奇妙な音であった。大きな行灯あんどんの明かりでよく見てみると、
まことに奇妙なものが見えた。何を見たのか。

武士の装束をつけ、身の丈たけ一寸ほどの小人こびとが何百となく、枕まくらのぐるりで踊っている
のであった。小人たちは日本の武士が着る礼服かみしも（袴かみしも）のことで、肩はぴんと張っていて、
裾すそまで垂たれる長い衣服）を着て、髪の毛は束ねて結んであり、それぞれが大小二本のち
っぽけな刀を差していた。小人たちは踊りながら、一斉いっせいに女を見て、笑い、一斉に同じ
歌を繰り返し何度も歌った。

「ちん・ちん こばかま

夜も更けふ 侯そうろう

お静まれ、姫君！

や とん とん！」

この意味はこうである。「われらは、ちん・ちん 小袴である。時間はおそい、寝なされや、いとやんごとなきお姫さま！」

その言葉はきわめて丁寧に思われたが、小人たちは、無情にも自分をからかっていることが、間もなく分かった。小人たちは眉まゆをしかめて醜い顔つきもした。

女は小人のいく人かをつかまえようとしたが、誰もかれもあまり素早く跳とび回り、つかまえることができなかった。そこで、追い立てようとしたのだが、小人たちは、

「ちん・ちん　こぼかま」

と歌いながら、あざ笑い、立ち去ろうとしなかった。その時、女は、これは小妖精である
と思った。そしてとてもおびえてしまい、大声で人を呼び出すこともできなかった。朝ま
で妖精たちは女の回りで踊った。それから、ふっと姿を消した。

女は、その夜起こったことを誰かに話すのを恥じた——なぜなら、武士の妻であったか
ら、自分がどんなにおくびよう臆病であるかを、誰にも知られなくなかったのである。

次の晩もまた小人たちはやってきて踊った。また次の晩もやってきて、ついに毎晩——
いつも、きまつて同じ時刻——昔の人が「丑うしの刻こく」と呼んでいた、今の時間ならさし
ずめ午前二時頃——にやって来るようになった。とうとう女は睡眠不足とおびえで、ひど
い病いにかかってしまった。それでもなお小人たちは女をそのままにしておこうとはしな
かった。

夫が帰宅すると、妻が病いの床についていたので、夫は大変心を痛めた。はじめのうち妻は、夫に笑われるのを恐れて、なぜ病気になったのか、そのわけを話すのが不安だったが、夫はとても親切で、妻をととてもやさしくなだめすかしたので、しばらくすると、毎晩、何が起こったのかを話しはじめた。

夫はちつとも妻を笑ったりせず、それどころか、しばらくの間、とても真面目な顔をしていた。それから夫は尋ねた。

「何時に奴らは出て来るのだ」

妻は答えた。「いつもきまつて同じ時刻に——丑の刻に」

「よーし、今夜、おれが隠れて奴らを見張ろう。だからこわがるでないぞ」と、夫は言った。

そこで、その晩、その武士は寢室の押入れの中に身を隠し、すべり戸の間のすき間から

見張り続けた。

夫は見張りながら待ち、ついに丑の刻になった。その時、にわかには、小人たちが畳を通り抜けて、こつ然と現われた。そうして、踊りながら歌い始めた。

「ちん・ちん　こぼかま

夜も更け俟う

お静まれ、姫君！

や　とん　とん！」

小人たちがあまりに滑稽こっけいな様子をして踊ったので、その武士は吹き出しそうになってしまった。だが、この武士は若い妻のおびえた顔を見て、ふと、日本の幽霊や悪鬼どもは、

みんな刀を恐れることを思い出した。それで男はやおら刀を抜き、押入れの外へ突進し、その小さな踊り手たちに刀を振りかざした。するとたちまち小人たちは、すべて変身してしまった——何になったと思うかな。

ようじ
楊枝！

そこにはもはや、小さな武士たちはいなかった——ただ、たくさんの古い楊枝が、畳一面に散らばっていた。

若い妻はあまりに怠け者だったので、自分の使った楊枝をきちんと片付けることをしなかった。毎日、新しい楊枝を使ったのち、それを厄やっかいもの介物払いよろしく、床の上の畳と畳の間に刺し込んでいたのだった。それで、畳の面倒を見ている小妖精たちは腹を立て、この女を悩まそうとしたのである。

夫が妻を叱りつけると、妻はどうしたらよいか分からないほど恥じ入った。

一人の召使が呼ばれ、楊枝は運び去られて、燃やされた。それからというもの小人たちは、二度とやっつてはこなかった。

怠け者の少女についてのこんな小話もある。少女は李すももを食べた後、きまつて畳の間に李の種子を隠したのであった。長い間、誰にも見つからずにことうすることができた。だが、ついに妖精たちは怒って少女を罰した。

毎晩、とつてもちつぽけな女たちが——袖そでは長く、裾はまばゆいほどの緋色ひいろの衣裳を着て——同じ時刻に床から現われ、踊り、少女に顔をしかめたりした。

少女の母親は一晩まんじりともせずに見張り、小人を見るや、襲いかかった——すると、小人らはすべて李の種子に変貌へんぼうした！そこで、その少女の不作法ぶさほうがばれてしまったわけだ。その後、少女は、本当にとても良い娘になった。